

# 「平家物語」の装束描写に関する一考察

——「能登殿最期」における教経の場合を中心に——

島田 康行

## 1 はじめに

「平家物語」は、その教材化において多様な方向づけが可能である。そしてどのような方向で教材化するにせよ、その方向は章段の選択と密接に関連することが、常に認識されなければならない。教材化の方向は、しばしば幾つかの型に大別されるが、その中でも〈人物像の追求〉は主要なものと見なされていると言える。例えば、世羅博昭氏は「戦乱の世を生きるさまざまな人間の姿を見つめよう。」をテーマに「一の谷の合戦の場」の教材化を試みられている<sup>①</sup>。そしてこの実践においても、教材化の方向を決定することで、選択される場面はおのずと特定されていると言える。

では、〈人物像の追求〉を目標として「平家物語」の教材化を試みるとき、すなわち「ある人物がどのような人間として描かれているか」を探ろうとすると、「平家物語」は、そのためにどのような手掛かりを用意していると考えられようか。

西田直敏氏は、「平家物語」における人物造形の手法について次のようにまとめられている<sup>②</sup>。「主として、行動を通しての人間像が描かれる。心理が精細に描写されることは少ない。また容貌の細かい描写や表情の微妙な変化は描かれず、「容顔まことに美麗なり」式の概念的な表現である」。その一方で、武士の服装描写は「木曾最期」における義仲に見られるように「精細で色彩豊かに描き」出されている。

この武士の装束描写が担う役割の重要性についてはすでに多くの指摘がある。例えば山下宏明氏は「語られる武装の実態が、その人物の年齢や階層はもちろんのこと、物語におけるその人物の存在意識をも表わしている」ことに注目して、物語の叙法についての新たな見解を示された<sup>③</sup>。また矢代和夫氏は「実盛」(巻七)において、実盛の着用した直垂・鎧が、物語における彼の説話的人格の形成に寄与するものであったことを論証され、「装束を示す語が、作品中の記述に再現的に記されるや、その最初の実用的な意味は二次的に後退して、別の新しい意味が人間との関係で支配的になっている」、すなわち装束の描写は「物の名が人間を表現する一例」であると位置づけられた<sup>④</sup>。これらの先行研究はいずれも、装束の描写が行動の描写と並んで「平家物語」の人物造形の手段として重要なものであることを示している。

「橋合戦」(巻四)「敦盛最期」(巻九)や「能登殿最期」(巻十一)の実践例・指導法・指導資料の中にも、写真・スライドを利用した装束の説明によって、「赤地の錦」や「唐綾威」が具体的にどのようなものかを理解し、武将たちのイメージを明確化することが望ましいとしたものは

ある<sup>9)</sup>。ただし、装束描写を〈人物像の追求〉のために積極的に利用しようとする試みは未だこれを見ない。教室での〈人物像の追求〉は、発話を含めた行動の描写を手掛かりに行われるのが一般的かと思われるが、前述の先行研究の例は、装束の描写もまた〈人物像の追求〉の手掛かりになる可能性が十分にあることを示している。もし装束の描写によって、行動の描写からでは把握しきれない人物像が浮かび上がるならば、これを手掛かりとして活用しないで見逃ごしにできない損失と言える。そこで小稿では「平家物語」における武士の装束描写が、〈人物像の追求〉にどこまで有効なのか、「能登殿最期」<sup>10)</sup>（巻十一）における教経の装束を例に確認を試みる。

## 2 装束描写の概要

まず「平家物語」における武士の装束描写の全体を概観しておきたい。軍記物語における合戦装束の描写については、駒田貞夫氏の「それが確かに作品の彩りを豊かにするものであるという意味合いにおいては、眼が向けられているが、そうした描写そのものの持つ意義や、更にはそれと作品との成立事情や内部生命との関連については、ほとんど注目されていない<sup>11)</sup>。」という指摘に見られる通り、関連の研究は決して豊富とは言えず、全容の解明にむけて調査の余地が多分に残されている。このことは、装束の描写が教室での指導に積極的に活用されないでいることの一因になっているとも考えられ、個々のケースの検討に入る前に、ここで全体を概観しておくことは必要な手順だと思われる<sup>12)</sup>。

次の（表1）は、「平家物語」に見いだされる武士の装束描写のうち、3種類以上の装束が記されたものについて巻ごとに整理を試みたものである。（数字は叙述される順序を示している。）

周知の通り、装束の描写には一定の型があり、語られる装束の順序は整然としてひとつの基準をなしている。表中の数例に甲が矢・弓の後に回るものが見られるが、これらは例外なく「甲をばぬぎ」「甲はきたまはず」のように、「たかひも」にかけるなど実際には装着していない場合である。そして叙述の順序が乱れるのは、この実際に着用していない甲に言及する場合に限られる。このような例や、「あぶれたる兵共、或はよろひきていまだ甲をきぬもあり、或は矢負うていまだ弓をもたぬもあり。片鎧踏むや踏まずにて、あはてさはいで馳せまはる。」（巻二「烽火之沙汰」）の例は、装束の各単位が叙述される順位の決まり方を考える上で、示唆的と見るべきかもしれない。

表中①で示したのは、赤・紺地など錦の直垂を着用しているものである。全文中では、これに栲岐判官知康（巻八「鼓判官」）の1例が加わり16例が見出せる。語り物としての「平家物語」鑑賞のために、学習者は、高価な錦の直垂が、相応の身分ある武将にのみ許されたものであることや、それが語り手と聴取者との間に共通の認識として存在することによって、錦の直垂がそれを着用するものの身分を示す役割を果し得ていることを知るべきである。そして、そのような認識を学習者もまた共有していることが、語り物の鑑賞には重要な意味を持つと言えよう。

また、この16例は「存ずるむね」あって、敢えて錦を見つけた実盛（巻七「実盛」）の例を

(表1)

卷	人物名	狩衣	直垂	腹巻	鎧	甲	刀	矢	弓	馬	鞍
一	家貞	1		2			3				
二	唱		1		2	6	3	4	5		
四	祐慶				1	2	3				
	清盛		①	2			3				
	信連	1		3			3				
	競	1			2	3	4	5	6	7	
	頼政		1		2	3					
	仲綱		①		2	3					
	明秀		1		2	3	4	5	6		
	忠綱		1		2	3	4	5	6	7	8
五	兼綱		①		2	4				3	
	維盛		①		2					3	4
	忠度		①		2					3	4
七	永覚				1	2	3				
	覚明		1		2	6	3	4	5		
	実盛		①		2	3	4	5	6	7	8
八	経正		①		2	6	3	4	5		
	義仲		①		2	6	3	4	5		
	行家		①		2	6	3	4	5		
	澄成		1		2	6	3	4	5		
九	親綱	1		2						3	
	重綱		1		2					3	4
	義経		①		2	3	4	5	6		
	義仲		①		2	3	4	5	6	7	8
	直実		1		2					3	
	直家		1		2					3	
	直旗		1		2					3	
	李重		1		2					3	
	旗差				1	2				3	
	盛嗣		1		2					3	
	忠度		①		2					3	4
	重衡		1		2					3	
	盛長		1		2					3	
	敦盛		1		2	3	4	5	6	7	8
	通盛		①		2					3	4
十一	盛綱		1		2					3	
	義経		①		2		3	4	5		
	教経	1*			2		3	4	5		
	菊与		1			2	3	4			
	教経		①		2	6	3	4	5		
					2		3				

(1\* : 小袖)

含んでいる。この章段における装束の役割は、既に矢代氏の論考に詳しいところであるが<sup>9)</sup>、侍にすぎない実盛が「朽ちもせぬむなしき名のみをとゞめ」るために、特に許しを得て錦の直垂を着たことが明らかになる下りも、錦の直垂の分布状況を把握していることが鑑賞の前提になると考えられる。

さらに「那須与一」(巻十一)において与一は「あか地の錦をもておほくびはた袖いろえたる直垂」を着て登場する。ここでの彼の装束は、馬・鞍を除いて(ただし、少し後に「黒き馬のふとうたくましるに、小ぶさの鞆かけ、まろほやすたる鞍をいてぞのたりける」と描写される。)6種揃えと詳しく描写されており、錦を装飾に用いた華やかな直垂がひとときわ目を引いている。この例も装束描写の全体の中に置いて初めて、与一程度の身分の者には異例の描写であることが明らかになり、そこに場面の主人公与一を前面に押し出そうとする作者の意図を読み取ることも可能になる。

直垂に鎧、あるいは郎党など下位の士の場合は狩衣に腹巻という一般的な型からはずれるものを拾ってみると「教訓状」(巻二)で重盛に諫められる清盛、さらには「競」(巻四)における競の例などがある。

「ひゃうもんの狩衣の菊とちおほきらかにしたるに、重代のきせなが、緋おどしのよろひに星じろの甲の緒をしめ、いか物づくりの太大刀はき、廿四さいたる大なかぐろの矢おひ、瀧口の骨法わすれじとや、鷹の羽にてはいだりける的矢一手ぞさしそへたる。しげどうの弓もて、媛廷にうちのり、…」(巻四「競」)

宗盛に愛馬「木のした」を召し上げられた仲綱のために、以仁王の挙兵に乗じて今度は宗盛の愛馬「媛廷」を、仲綱のもとに送り届ける競の活躍は、石母田正氏によって「平家の中でもっとも面白い話の一つ」と評された物語である<sup>10)</sup>。大きく菊とちを施した狩衣の競が、三井寺へと名馬を駆る姿はきわだって印象的であり、身分の低い競が見事に宗盛を欺くところにこの挿話の痛快さがある。あでやかな菊とちの狩衣と鎧との装束描写によって、競の「形勢を見るに敏で、狡猾で、打算的で、機転のきく」<sup>11)</sup>畿内武士の一典型としての造形は完成しており、召し上げた名馬に「仲綱」と「かなやき」をしてこれを責める宗盛との対照は明確なものとなっている。全文中で狩衣に鎧という装束描写がなされるのは、この競が唯一の例である。

「平家物語」を教材とする場合、それは必ず抄出の形をとることになる。したがって、教材の範囲中に現れる装束描写も当然、数量的に限りがあることになるが、その一つ一つが、どの一つであれ、装束描写全体の中に固有の位置を占めるものであることは言うまでもない。教材中に現れた装束描写について、いかなる取り扱いをしようとも、その描写が全体の中にどう位置づけられるものなのかを把握した上で扱うのが望ましいことには変わりはないのであり、少なくともそのための模索は繰り返されるべきである。以下の「能登殿最期」における教経の装束描写に関する考察は、その模索の一端である。

### 3 教経の装束

#### 3-1 ひとつの疑問

一門の滅亡を目前にしながらも、武将として最後まで戦い抜く道を選ぶ教経の人物像を追う場合、あるいは教経と対照的に運命を静かに見極めようとする知盛との対比を通して、二人の人物像を追う場合、「能登殿最期」（巻十一）を中心として、いよいよ平家が最後を迎える壇の浦の場面は、恰好の教材となるだろう。

そこでここでは「能登殿最期」における教経の装束を例にとり、その描写が彼の人物像を追求する上で果たしてどこまで有効かを考えてみたい。

「凡そ能登守教経の矢さきにまはる物こそなかりけれ。矢だねのある程みつくして、けふを最後とやおもはれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾おどしの鎧きて、いかものづくりの大太刀ぬき、白柄の大長刀のさやをはずし、左右にもてなぎまはり給ふに、おもてをあはする物ぞなき。」（下線筆者、以下同様）

「赤地の錦の直垂」や「唐綾おどしの鎧」は、いずれも大將軍にふさわしい装束である。すでに射尽くした矢・弓は詳述されず、太刀・長刀へと進む描写は一応型通りと言える。装束の各単位について具体的な理解を促すことで、両手に得物を持って敵を蹴散らし孤軍奮闘する大將軍教経の姿は学習者にも容易に喚起されよう。

しかし、この章段を取り上げるたびに、下線部の「けふを最後とやおもはれけん」という作者の推測には、いささか落ち着きの悪さを感じざるを得ない。この推測は、作者がその日の教経にこれまでの戦における教経とは異なる何かを見ていることを思わせるのであるが、作者の推測がいかなる根拠のもとに行われているのか、前後の文脈にはっきりとした根拠と言えそうなものが見当たらないのである。奮迅の活躍を見せる武将は教経に限るまいし、教経自身「嗣信最期」（巻十一）において無敵の戦いぶりを見せている。また「赤地の錦の直垂」「唐綾おどしの鎧」の装束も最期の決意を表すものと、一般に言うことはできない。いったい作者は、その日の教経のどこに「今日を最後と思われたのだろうか」と推測し得る根拠を見出しているのだろうか。

では、このような推測が行われるのはどのような文脈においてか、「平家物語」全文中から類例を求めると、次の一例のみが得られる。

「源三位入道は、長絹のよろひ直垂にしながらはおどしの鎧也。其日を最後とやおもはれけん、わざと甲はき給はず。嫡子伊豆守仲綱は、赤地の錦の直垂に、黒糸威の鎧也。弓をつようひかんとて、これも甲はきざりけり。」

「橋合戦」（巻四）の、頼政とその嫡子仲綱の装束が語られる下りである。ここでも作者は、教経の場合と同様に、頼政が身につけた装束を語るに際して「その日を最後と思われたのだろうか」という推測をはさんでいるわけである。しかしここでは、作者がこのような推測を行なった根拠は示されていると見ることができる。押し寄せる平家の大軍を前に頼政・仲綱の親子は甲を着用しないという、いわば特殊ないでたちである。「其日を最後とやおもはれけん」「弓をつようひかんとて」の部分は、それぞれ頼政・仲綱が合戦に臨んで甲を身につけないという特殊な装

束であることについて、その理由を説明する形になっていると解することができよう。

「其日を最後とやおもはれけん」「けふを最後とやおもはれけん」の2例のうち、頼政の装束描写に現れた前者については、作者がそのような推測を行なった根拠を、文脈中に見出すことができる。とすれば、残る教経の例についても、頼政の場合同様、作者が「けふを最後とやおもはれけん」という推測をさしはさんでいることには、やはり相応の根拠があると考えてしかるべきではないだろうか。

また、頼政・教経の両者が、ともに作者の推測通り「其日・けふ」のうちに最期を遂げていることから、この「推測」は結果的に二人の最期を予告することになっているとも言えようが、最期を予告することに「推測」の目的があったとも思われぬ。全文中で討ち死にを遂げるのは、もちろんこの二人に限らないが、予告と見做せるような叙述は、他の人物については見られず、二人に限って予告が行われることの説明はつかない。

やはり、この作者の推測にはもっと別の、具体的かつ積極的な根拠の存在を仮定したい。そして、その根拠を明らかにすることが、この作者の推測が教経の装束とともに語られることの意味をも明確にすることになるはずである。

### 3-2 ふたつの装束描写から

教経は義仲・義経と並んで、全文中で複数回、その武装を描写されている人物の一人である。三人の装束描写がどのようになされているのか、ここでは直垂と鎧に注目して簡単な比較を行ってみる。

a. 義仲「木曾は赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧きて…」(卷八「山門御幸」)

「木曾左馬頭、其日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾おどしの鎧きて…」

(卷九「木曾最期」)

b. 義経「九郎義経其日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫すそごの鎧きて…」

(卷九「河原合戦」)

「九郎大夫判官、其日の装束には、赤地の錦の直垂に、紫すそごの鎧きて…」

(卷十一「嗣信最期」)

義仲・義経の両者に関しては、その武装がある特定の形に定着していることがわかる。諸本には異動も存在するが覚一系のこの本文では二人の武装は上の形に固定している。富倉徳次郎氏に拠れば「義仲の武装のイメージを唐綾威に定着させる傾向」は諸本に見られ<sup>(12)</sup>、一方「『義経記』にも義経の鎧については、「紫裾濃」とあるところを見ると、そうした伝えが一般に行なわれ、それに統一されていったものと考えられるのである<sup>(13)</sup>。」と、両者の武装が語りもの系の本文において特定の型を持つに至った経緯が説明される。

「おなじくは大將軍の源九郎にくん給へ。色白うせいちいさきが、むかばのことにさしいでてしるかんなるぞ。たゞし、直垂と鎧をつねにきかふなれば、きと見わけがたかん也。」

(卷十一「鷄合壇浦合戦」)

本文中には、平家方の侍大将をして上のように言わしめている場面があるにもかかわらず、実際に義経の武装が描写される時には、常に前述の型が用いられる。固定された武装の描写を繰り返すことで、より具体的で明確なイメージを形成しようとする工夫なのであろう。また義仲はその武装こそ「赤地の錦の直垂」に「唐綾威の鎧」と勇壮な姿に固定されているが、一たび合戦の場を離れるや、不作法な振舞いが都人の嘲笑・軽蔑の的となり、その装束においても、

「木曾は、官加階したるものの、直垂で出仕せん事あるべうもなかりけりとて、はじめて布衣とり、装束烏帽子ぎはより指貫のすそまで、まことにかたくななり。されども車にこがみのんぬ。鎧とてき、矢かきをひ、弓もて、馬にのたるにはにもにずわろかりけり。」

(巻八「猫間」)

と、著しく落差のある評価がなされている点は注目に値しよう。

c. 教経「能登守教経「ふないくさは様ある物ぞ」とて、鎧直垂はき給はず、唐巻染の小袖に唐綾威の鎧きて…」

(巻十一「嗣信最期」)

「けふを最後とやおもはれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾おどしの鎧きて…」

(巻十一「能登殿最期」)

さて教経の二度の装束描写であるが、上のように前の両者とは幾分その様相を異にしている。鎧の「唐綾威」は動かず、固定されていると見ることができが、鎧の下に身につけた装束は、小袖から錦の直垂へと変わっている。同一人物の合戦装束を特定の型に定着させることが、語り物における人物造形の一手法であるならば、その手法を放棄してまで、敢えて二通りに装束を描写することには、そうするだけの必要があったことを認めなければなるまい。

「嗣信最期」において教経が直垂ではなく小袖を着たのは、「ふないくさには様あるものぞ」すなわち、海上での合戦にはそれなりの方法があるのだ、という判断に拠っていると解される。具体的には、揺れる船上あるいは浅瀬に降りても自在に行動できるように、小袖を着てひざを露出することを言うのであろう<sup>40</sup>。

武をもって旨とし、己の力の限りを尽くして戦い抜く教経の姿は「六箇度軍」(巻九)でも平家一門の賞賛を得るところとなるが、この「嗣信最期」での小袖姿は知盛の諫めを誤解する下り(「能登殿最期」)と併せて、彼の人物像をもっとも端的に表したもとは言えないだろうか。多くの武将が登場するこの合戦の場面において、ほかならぬ教経が、「ふないくさ」の特異性を知り抜いた人物として小袖を着用させられていることには、重要な意味があると考えらるべきであろう。

その教経が「能登殿最期」においては、同じ「ふないくさ」に「赤地の錦の直垂」を着て登場する。大將軍にふさわしいその装束に、「けふを最後とやおもはれけん」という推測を介入させる余地は、「嗣信最期」の小袖姿を踏まえて初めて見いだせるのではないだろうか。そして作者にとって、ほかならぬ教経が「ふないくさ」という状況の下で錦の直垂を着用することは、——たとえそれが大將軍にふさわしい装束であるにしても——、死の覚悟をも推測させる特別な事情となり得たはずである。

そして「ふないくさ」では小袖を着る程いくさに長け、合戦の趨勢とは無関係に奮迅の活躍を見せて勇壮な最期を遂げる教経の装束を、「赤地の錦の直垂に、唐綾おどしの鎧」と語ることは武門たる平家の最後の誇りを描くに実にふさわしいと選択であったと思われる。

#### 4 おわりに

以上、「平家物語」における装束描写が、人物造形に重要な役割を果たしていることを前提に、教経の合戦装束を例にとり、それが教経の〈人物像の追求〉に有効な手掛かりとなり得ることを確認した。実際には「能登殿最期」における「けふを最後とやおもはれけん」という作者の推測の根拠に対する疑問が発端となり、「嗣信最期」に見える装束描写が教経の人物像に迫るひとつの鍵であるとの結論を導いている。「ふないくさ」に小袖を着た教経の武者ぶりを踏まえることで、「能登殿最期」の大将軍らしい装束に秘められた彼の死の覚悟は、よりはっきりとした形で把握されると考えたわけである。そしてこう考えることで、発端となった作者の推測にひとつの根拠を想定することも可能になった。

また、教経は「嗣信最期」の中で部下の菊王丸を失い、その悲しみに戦をやめてしまうという一面を見せる。同様に部下を失った義経のとった行動が、教経の行動と並べて語られるこの章段は、教経の人物像を追うという目的のもとに「能登殿最期」と比較することで、興味深い教材となり得るとと思われる。

実践において、装束の各单位、例えば「赤地の錦の直垂」「唐綾威の鎧」について具体的に理解させることは、もちろん重要である。さらに装束描写を〈人物像の追求〉の手掛かりとするならば、そのような装束が、どのような階層に属する人物を表しているのかを把握させておくことが、鑑賞に先立って行われるべきことは言うまでもない。また、個々の描写の位置づけを考えるために、あるいは装束の描写が人物造形の手段として重要な役割を果たしていることを知るために「平家物語」における装束描写の概要を把握させることも積極的に試みられてよいと思われる。教材中に現れる装束描写の数が事実上ごく限られているために、個々の描写の全体における位置づけが見えにくいことが、装束描写を〈人物像の追求〉の手掛かりとして利用する際の大きな問題であるが、全体の概要を学習者に示すことで、この問題はある程度、克服することができるであろう。

「敦盛最期」や「木曾最期」など、しばしば教材として取り上げられる章段の中にも合戦装束の描写は数多く見られる。それら個々のケースについても〈人物像の追求〉に対する有効性を確認する作業は、今後とも継続して行われる必要がある。

#### 注

- (1) 世羅博昭「『平家物語』の学習指導——「一の谷合戦の場」をとりあげて——」(『国語教育研究』24号 1978. 8 pp.61-80)
- (2) 西田直敏『平家物語の文体論的研究』(明治書院 1978) pp.41-42

- (3) 山下宏明「『平家物語』合戦談の叙法」(『文学』54-9 岩波書店 1986.9 pp.94-106)
- (4) 矢代和夫「覚え書きノート」(『東京都立大学人文学報』117 1976.12 pp.47-66)
- (5) 例えば、西俊六「『橋合戦』を指導する」(『月刊国語教育』3-6 東京法令出版 1989.9)  
山崎賢三「『平家物語』の多様な指導法」(『月刊国語教育』9-9 東京法令出版 1989.12)  
山本健吉他『新選国語一 四訂版 指導資料 古文編』(尚学図書 1991)など。
- (6) 岩波古典文学大系の段落構成による。
- (7) 駒田貞夫「『今昔物語』から『平家物語』へ——合戦装束描写にみる変質と発展——」(『古典遺産』21号 pp.19-36)
- (8) 小稿では覚一系の龍大本を底本とする岩波古典文学大系所収の本文を閉じられたテキストとして使用した。ここでは3種以上の装束描写に限って掲げてあるが、2種以下を含めると、なお10例以上が見いだせる。また表中の「人物名」は便宜的なものであり、「刀」には長刀などを含めている。
- (9) 矢代和夫 前掲論文
- (10) 石母田正 『平家物語』(岩波書店 1957) p.12
- (11) 石母田正 前掲書 p.113
- (12) 富倉徳次郎『平家物語全注釈』(角川書店 1967) 中巻 p.455
- (13) 富倉徳次郎 前掲書 下巻(一) p.439
- (14) 「水嶋合戦」(巻八)においても、千余艘の味方の舟に「あゆみの板」を渡して源氏の軍勢に臨み大勝利を収めるなど、教経は海上戦に優れた行動力を示す人物として描かれている。